

棕の道草 第33回 季語に囲まれて

藤井紀子

秋は風からと万葉歌にも詠まれています。刈田、櫓田、稻架、爛れてきた曼殊沙華等、風に乗って木犀の匂ふ頃には祝ぎ事にも伝わってきます。そして道々の草木に宿る露の玉の美しさは限りありません。

わが背子を大和へ還るとき夜更けて

暁露に我れ立ち濡れし

大伯皇女が大和へ帰る弟大津皇子を見送った謡です。こんなに悲しい淋しい美しい露は外にあるのでしょうか？

歴史の虚しさを感じます。

またちらちら儂な気に飛ぶ綿虫、火の恋し等、秋は人の心を感じ傷的に鎮めてもくれます。

清少納言は秋の情趣は夕暮に限ると云っています。虫の音や月を強く感じるのも此頃です。

待宵、一六夜、宵闇、十三夜等日本人ならではの美意識に満ちた何と美しい季語でしょう。又晩秋から初冬には石露の花が咲き出します。季語の中で暮らして行ける日々を大切にしていきたいと思います。